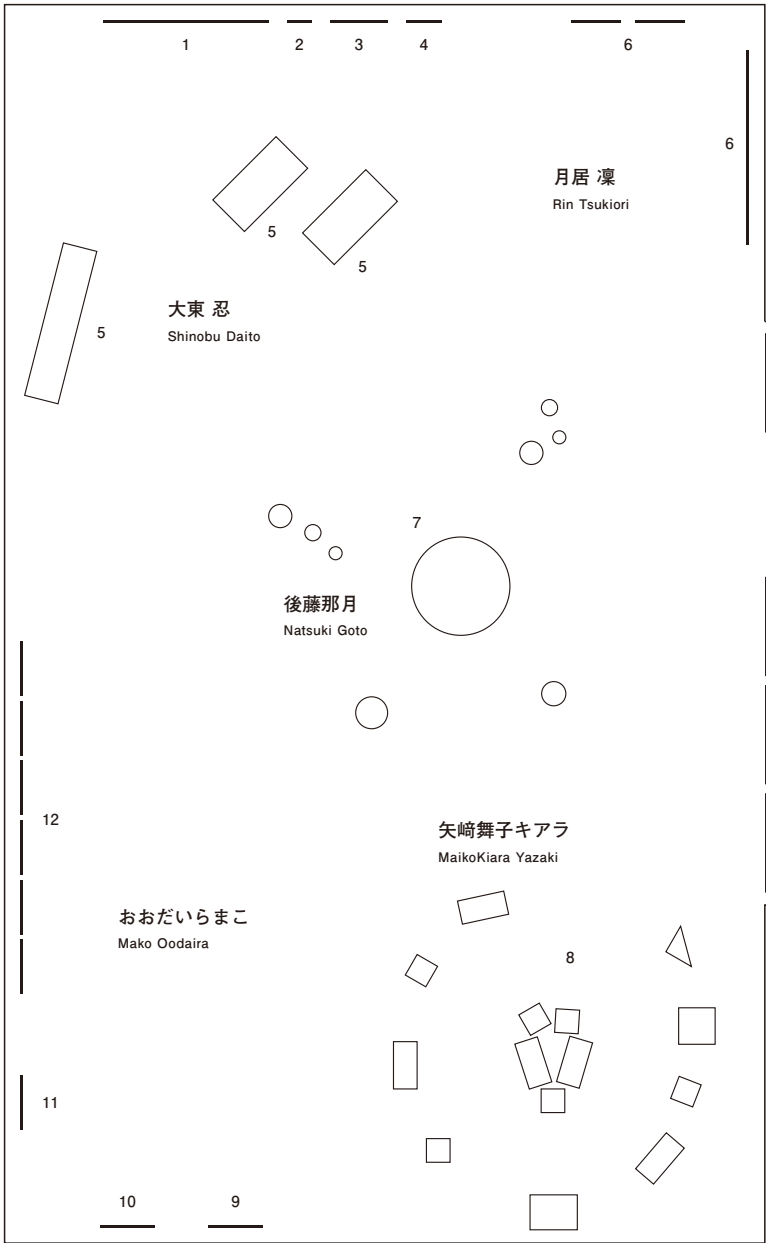


漂着する思考

新屋浜をめぐる現代作家との対話



12. 円頂天 -ウチョウテン-	12-1	12-2	12-3	12-4	12-5	12-6
	12-7	12-8	12-9	12-10	12-11	12-12
	12-13	12-14	12-15	12-16	12-17	12-18

お問い合わせ先
NPO法人アーツセンターあきた
TEL 018-888-8137 FAX 018-888-8147
E-mail info@artscenter-akita.jp
Web https://www.artscenter-akita.jp



漂着する思考

Exhibition of Creativity and Innovation

新屋浜をめぐる現代作家との対話

2024.7.20 sat－8.4 sun

休館日 7/23(火)、7/30(火)
時間 10:00-18:30
観覧料 無料
主催 公立大学法人秋田公立美術大学、
NPO法人アーツセンターあきた(秋田市文化創造館指定管理者)
企画制作 NPO法人アーツセンターあきた
キュレーション 高橋ともみ
ビジュアルデザイン 越後谷洋徳
インストール 國政サトシ、青木邦仁
監修 藤 浩志
助成 芸術文化振興基金、公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団
秋田県、秋田県教育委員会、秋田市、秋田市教育委員会、秋田魁新報社、
朝日新聞秋田総局、読売新聞秋田支局、毎日新聞秋田支局、秋田経済新聞、
NHK秋田放送局、ABS秋田放送、AKT秋田テレビ、AAB秋田朝日放送、
CNA秋田ケーブルテレビ



出品作品リスト

作品名 / Title	技法・素材 / Medium	サイズ / Size (mm)	制作年 / Date
【大東 忍】			
1. 踊り場(秋田市下浜名ヶ沢、郡上おどり かわさき)	木炭、麻布、パネル	1455×3360	2023
2. 踊り場(秋田市浜田、白鳥おどり 世栄)	木炭、麻布、パネル	500×606	2024
3. 風景を渡る	木炭、麻布、パネル	910×1167	2024
4. 踊り場(秋田市御野場、Sleep No More)	木炭、麻布、パネル	606×727	2022
5. 例えば灯台になること	公開実践の記録資料	映像 31分32秒	2024
【月居 凜】			
6. M 0.40	映像	-	2024
【後藤那月】			
7. 胎虚、或いは安息の地で	時間、塩、水、土、水性樹脂	-	2024
【矢崎舞子キアラ】			
8. 続・土楽器	赤土、手捻り	-	2024
【おおだいらまこ】			
9. 大きい橋	アクリル、キャンバス	910×1167	2023
10. 釣り	アクリル、キャンバス	910×1167	2024
11. 頼まれごと	アクリル、キャンバス	910×1167	2024
12. 円頂天 -ウチョウテン-		3310×6850(全体)	
12-1. 食卓	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-2. 潮干狩り	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-3. 海	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-4. 機窓	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-5. 車窓	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-6. ラクヨウ	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-7. 暮れ時	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-8. 堤防	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-9. 天井	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-10. 高速道路	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-11. 雨	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-12. 春	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-13. 水面	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-14. 初詣	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-15. 裏庭	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-16. 曖昧な時間	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-17. 松	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024
12-18. 引っ越し	インクジェットプリント、アクリル、キャンバス	1467×1100	2024

作家名 / Artist Name	作品名 / Title	技法・素材 / Medium	制作年 / Date
【秋田公立美術大学収蔵作品】			
13. 戸田雅子	うるしオブジェ	木・漆	2003年度
14. 阿部 葵	百鬼徒然夜行	油彩	2003年度
15. 江頭香織	金光の波形	真鍮	2006年度
16. 石毛彩子	りんご	ブロンズ／込型真土焼型鋳造	2009年度
17. 滝川ふみ	重力にひかれて	ガラス／ネットワーク	2009年度
18. 宇野未沙貴	あなたのなかに	洋白	2010年度
19. 市川寛士	生きてきたもの	ブロンズ／蠟原型、真土焼型鋳造法	2012年度

・ 大東 忍
Shinobu Daito

・風景を供養する

・風景から過去の営みの痕跡を読み、「風景を供養する」。

- 風景から過去の営みの痕跡を読み、「風景を供養する」。
- 風景を歩く・踊る・描くなどの実践を重ねることで「身体を澄まし」、「風景を踏みならし」てきた。それはひとりで風景に残る痕跡（＝過去の人たちの声、営みの跡）に身体全体を傾けることで引き受けることであり、祈りだ。
- 木炭画では夜の影のなか、盆踊りを踊る人物がいる光景を描いた。盆踊りは供養の踊りであり、踊ることで身体を解放的な状態にする（＝身体を澄ます）。また、盆踊りにおいてかかとを地面に叩きつけるような動作は鎮魂の祈りを込めた呪術的な動作からくるといふ。踊り、踏みならすことで風景の供養を試みる。木炭の粒子的な質感は物語る夜の深い影を画面に刻む。描くこともまた、歴史化されてこなかった営みの風景の供養だ。
- 《例えば灯台になること》では作家自身が「灯台になる」ことで風景に対峙すると同時に、風景の一部となり、風景をつくった。
- 参加者はガイドブックに載っている地図を頼りに横浜をめぐる。たどり着いたビューポイントで見つけた「灯台になる人」のいる風景の写真を撮り、用意されたウェブサイトにアップロードすることで風景の共有を試みる。本展では2024年5月11日と、6月1日におこなった公開実践「例えば灯台になること」の記録を展示する。各日19時から21時まで、灯台になる人として風景の一部になった。

- 大東 忍(だいとう・しのぶ) | 1993年愛知県生まれ。2019年愛知県立芸術大学美術研究科博士前期課程修了。風景から人の営みを読み取るために歩く・踊る・描く実践を行っている。[VOCA展 2024 現代美術の展望 -平面の作家たち]（上野の森美術館／東京、2024）にてVOCA賞受賞、個展「TOKAS-Emerging 2023『風景を踏みならす』」（トーキョーアーツアンドスペース／東京、2023）、「なめらかでないしぐさ　現代美術 in 西尾」(康全寺／愛知、2023) など。

・ 月居 凜
Rin Tsukiori

・確かに揺れ動くもの

・「あってもなくてもいいもの」を探して制作に臨んだ際、「北緯40度線」に目を向けた。それは、故郷にある北秋田市阿仁合町の北緯40度線モニュメントの存在である。数十年の中で、なぜ突然価値を与えられ、今まで荒れた状態で残されていたのだろうか。そして、北緯40度線モニュメントが存在する意義とは一体なんであるのか？3カ月にわたってモニュメントと向き合い、〈清掃〉〈観察〉という行為を繰り返して状態に保ち、還元した。戻ったものと、戻らなかったもの。微細であるが、確かに揺れ動く日々の記録。

・「あってもなくてもいいもの」を探して制作に臨んだ際、「北緯40度線」に目を向けた。それは、故郷にある北秋田市阿仁合町の北緯40度線モニュメントの存在である。数十年の中で、なぜ突然価値を与えられ、今まで荒れた状態で残されていたのだろうか。そして、北緯40度線モニュメントが存在する意義とは一体なんであるのか？3カ月にわたってモニュメントと向き合い、〈清掃〉〈観察〉という行為を繰り返して状態に保ち、還元した。戻ったものと、戻らなかったもの。微細であるが、確かに揺れ動く日々の記録。

- 「あってもなくてもいいもの」を探して制作に臨んだ際、「北緯40度線」に目を向けた。それは、故郷にある北秋田市阿仁合町の北緯40度線モニュメントの存在である。数十年の中で、なぜ突然価値を与えられ、今まで荒れた状態で残されていたのだろうか。そして、北緯40度線モニュメントが存在する意義とは一体なんであるのか？3カ月にわたってモニュメントと向き合い、〈清掃〉〈観察〉という行為を繰り返して状態に保ち、還元した。戻ったものと、戻らなかったもの。微細であるが、確かに揺れ動く日々の記録。

- 月居 凜(つきおり・りん) | 2001年秋田県生まれ。2024年秋田公立美術大学景觀デザイン専攻卒業。秋田の景觀に存在する「あってもなくてもいいもの」について研究。故郷の秋田県北秋田市阿仁合町に存在する北緯40度線モニュメントに注目した卒業制作(M 0.40)をきっかけに、「北緯40度線」プロジェクトを展開。

・ 後藤那月
Natsuki Goto

・〈知覚〉の在処

・私は、みえないものに心を惹かれる。それは時に、肌をかすめるような気配として感じられたり、傷を掘りおこされるような痛みであったり、みえない風景として記憶を揺らしてくる。それらすべては個人的記憶よりも遠く、人間の知覚のはじまりに結びついているのではないかと考える。人間がみえないものと対峙した際に生じる知覚の在処を探るべく、体験をビジュアルイメージに置き換えたり、あるいは身体を用いた表現などを空間に展開し鑑賞体験として提示することで模索し続けている。近年は歩くという行為を続け、旅先のリサーチと個人的な体験の交わりをもとに制作活動を通して発表を行なってきた。

- 私は、みえないものに心を惹かれる。それは時に、肌をかすめるような気配として感じられたり、傷を掘りおこされるような痛みであったり、みえない風景として記憶を揺らしてくる。それらすべては個人的記憶よりも遠く、人間の知覚のはじまりに結びついているのではないかと考える。人間がみえないものと対峙した際に生じる知覚の在処を探るべく、体験をビジュアルイメージに置き換えたり、あるいは身体を用いた表現などを空間に展開し鑑賞体験として提示することで模索し続けている。近年は歩くという行為を続け、旅先のリサーチと個人的な体験の交わりをもとに制作活動を通して発表を行なってきた。
- 私の活動の軸となるのは移動することである。これまで行なってきた旅の大半は、振り返ると目的のない移動であった。しかし複数の土地を行き来することで、人間の無意識の領域や土地の類似性を知ることができるのではないかと考える。まれびとであることが俯瞰の視点をもち、離れた事象同士を結びつけることを可能にする。
- 特に重要なのは、できる限り自身の足で歩くこと、気配の残る場所を探すこと。そしてその土地に住む誰かを知ること。その土地にまつわる歴史や風土について文献で知るよりも、そこに住む人々がかたちつくってきた個人的痕跡に関心があり、実際に出会い見聞きした要素からその土地を理解していく。そうして私が歩いたエリアはほかの土地からは離れた島となり、その旅自体に普段の生活からも物理的/精神的な距離が生まれ、周りを観察する際の意識も変えてくれる。これは、みえないものを見るための身体をつくるために重要な点である。地面は動き、風景はいつでも同じではない。だから歩くことを通じて何度でも土地を理解し直さなければいけないと思う。

・薄い円盤に張られている塩水は、時間をかけるごとに外気に触れることで蒸発し、水分が失われていく。同時に塩が現れ、時に温度変化によって結晶が独自の模様を成す。例えばこの円を覗きこみ、離れて、また覗きこむとする。すると先程はなかった（かもしれない）模様がみえてくる。

- 瞬間的に現れ、また瞬時に過ぎていくときのなかで、発生し変化を続けていくいまの断片に向き合うという行為。その事実を認識できるのは私たちが同じように"いまここ"に存在するからである。この思考が、私の思うはじまりに触れるための一歩だと考えている。
- 鉱物はカタチが残らないものの来歴を知るための手がかりになる。
- 点在している岩は、私の手によって形作られた偽岩であり、私の時間が蓄積したものだ。ある土地で拾った小石をランダムに粘土に押し付ける。小石が形を決める。拾った土地の記憶と、私がこの偽岩を形作るまでの記憶や時間がとどめられている。
- 鉱物は物質としても強い存在をもつが、対して自然の変化と共にその身を幾度となく変える。その時々その土地に存在しながらも、土地の過去を内包し、記録/記憶しているのだ。例えば巨岩のかけらが崩れ年月をかけて浜辺に辿り着く。それは土地と土地を繋いでいると考える。

- 後藤那月(ごとう・なつき) | 2001年秋田県生まれ。2024年秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻卒業。流動的に土地を渡り個人的体験と現地でのリサーチの交わりから、人類普遍の原始的な知覚や目であらえられない風景の変化を探るべく表現を続けている。個展「nowhere "Where Do We Come From"」(YAU STUDIO ／東京、2023)、個展「息の緒の通い路」(新屋NINO ／秋田、2022) など。

・ おおだいらまこ
Mako Oodaira

・記録すること、記憶すること 絵画を描くこと

- 近年、美術作品の鑑賞方法の一つに作品の写真を撮る、また作品と一緒に写真を撮るという方法が増えたように感じます。その鑑賞方法に対して、作り手側として思うところもありましたが、思い返せば私自身も日常生活の中で頻繁に写真を撮るタイプで、それと同じことだなと気づき、むしろ写真を撮ってくれてありがとうなのでは？と思い直しました。
- そして、改めて私たちが写真を撮る意味や理由は何なんだろうかと考えました。

- 現在、写真は誰でも簡単にすぐに撮ることができ、写真を撮らない日はないのではないと思うほどです。しかし大半の写真は撮影した後あまり見返すことがありません。それにもかかわらず、不思議なことに、一度撮影した写真のデータはなかなか削除できず、クラウドサービスにお金を払ってまで残しておいている現状があります。

- そう考えると、私たちがたくさん写真を撮る意味や理由というのは、誰かに共有するためというより、自分の中に残しておきたい＝忘れたくないという欲望なのかなと感じます。

- 日常や当たり前というのは結構すぐになくなるもので、何かが起きてこれまでの生活が変わると以前の日常がどうであったかを思い出せないということがよくあります。何かが起きた時、それが起きたことばかり考えてしまいますが、それによって何が変わったのか、そのことを思い出すことが本当は必要で、そのために正しい記録が必要だと思うのです。

- しかし、写真は目で見たそのままを完全に再現できるわけではなく、レンズを通した風景は形や色が異なるように感じてしまいます。ではその写真をより正しく、自分が納得できる〈記録〉にするにはどうしたら良いのかと考え、この作品を制作しました。

- 作品は基本的に写真を上からなぞって制作しています。その過程で写真では捉えきれしていない遠近感を足したり、色味を修正したりしています。元となる写真は作者である私自身が撮影し、スマートフォンのアルバム内に保存されているものから選びました。普段見返したりはしないけど消せない写真、それには自分が大切にしようとしている日常が入っている気がしたからです。

- また、写真をなぞる際はアプリケーションの機能などは使わず、自分の手で描いていますが、それは絵に描いて初めてその形を知る、という感覚があるためです。普段よく見ているはずのものでも、それを描こうとよく観察すると何かしら新しい発見があります。何かを描いてみると自分が普段いかに物事をいい加減に見ているか気付くのです。

- 写真を見て思い出すことがあるように、写真にはうつらないこともあって、それと同時に絵に描かないと気付かないこともあったりします。そしてその3つが重なったこの作品は、より正しい記録に近づいているのではないと思うのです。

- おおだいらまこ | 1995年青森県生まれ。『絵画作品と鑑賞者を含めた展示空間』をテーマに作品制作を行う。展示形態を一般的な壁掛けではないものにしたり、絵画作品とは何かという疑問のもと平面的ではない絵画作品を制作するなど鑑賞者と絵画作品がより良い関係性を築くための研究を続けている。公開制作「おおだいらまこ→ハッピーライフ」(秋田市文化創造館／秋田、2023)、第22回グラフィック「I_WALL」展(ガーディアン・ガーデン／東京、2020) など。

・ 矢崎舞子キアラ
MaikoKiara Yazaki

・未知の〈音色〉

・それぞれの楽器には、音を鳴らすために必要なポイントがある。

- ホイッスルの構造を研究。穴の縁に当たる息の角度が重要であることがわかり、より明確にクリアな音が鳴るよう、息の通り道に障害物がないようにした。本体と吹き口を分けて作り、音が鳴る角度を見つけてから合体させた。一吹きでハーモニーを作りたいと思い、大きさの違う笛を合体させた。さらにそれぞれの本体に音階を変える穴をあけることで、ハーモニーの組み合わせを増やし、音にバリエーションをもたせた。
- 従来の楽器とは違う形にすることで、見る人に音を想像してもらう。造形前から音を想像し、その音のイメージを形にしていく。全て形は違うが奏法や構造は同じであり、音に影響の出ない範囲で造形している。

- ひとつの楽器が出す音は、人の数ほど存在する。吹き方だけでなくその時の気分で出る音も変わる。

- 見たことも触れたことも奏でたこともないものを手に取り、音を出す。すると、自分が想像していた奏で方とは違うやり方で音を出す人や、自分があまり出せなかった音を綺麗に出す人、個性の出し方がそれぞれ違っていた。しかしリズムの取り方や音の変え方、鳴らすタイミングにはそれぞれの想いが一つになり、つまずく瞬間はなかった。進行のリードをする人、ループする人、拍子の頭で音を出しアクセントをつける人が自然と出来上がり、一つの音楽ができた。ピアノのように音階が変わるものではないため、純粋に音だけに集中して演奏することができる。ちょっとしたズレを気にして緊張することがないからである。

- これからの土楽器はどうなってゆくのか。新たな土楽器を交えて音を広げていく。セッションだけでなく、音を追求した上で作曲をする、実験的要素のある楽器である。

- 矢崎舞子キアラ（やざき・まいこ・きあら）| 2001年秋田県生まれ。2024年秋田公立美術大学ものづくりデザイン専攻卒業。陶芸とガラスを学び、土でできた楽器が少ないという気づきから生まれた“土楽器”（どがっき）を制作。さまざまな楽器の演奏経験を活かし、音の出る仕組みや土で表現するための研究と実験を重ねている。